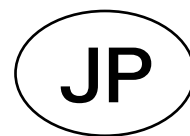
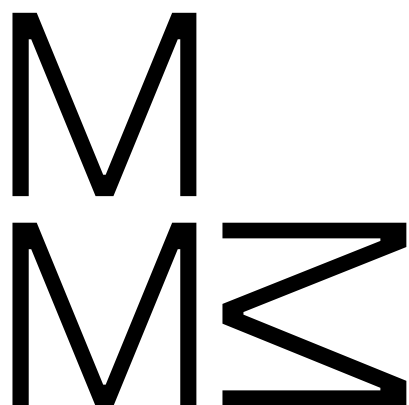


シュピルベルク城・要塞
シュピルベルク城の観光案内



Příběh hradu



Muzeum města Brna

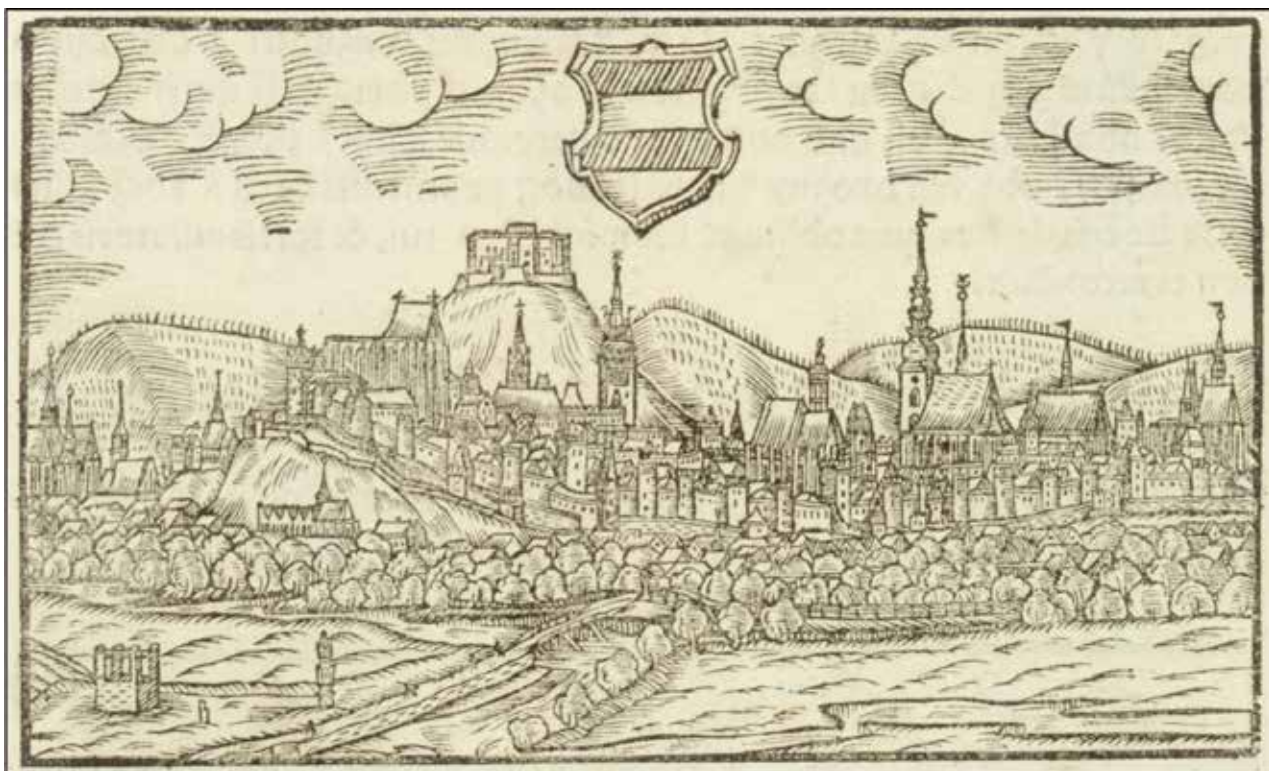
hrad Špilberk

ご来場の皆様

ブルノ市立博物館の所在地となっている国立文化財シュピルベルク城・要塞へようこそお越しくださいました。

シュピルベルクは700年以上にわたり、ブルノ市の重要なランドマークであるとともに、君主の権力と人々の苦しみの象徴となってきました。これまで幾度となく建て直され、様々な目的に使用されています。このガイドツアーでは、シュピルベルクの豊かな歴史を簡単にご紹介いたします。

ご質問がございましたら、いつでもお知らせください。喜んでお答えいたします。



ブルノの町とシュピルベルク城が描かれた最古の風景画『ブルノ南東方面からの眺め』（1593年）ヤン・ビレンベルク作 『著名なモラヴィア辺境伯の鏡』（バルトロムニエイ・パプロツキー・ズ・フロホル著）の挿絵

王の城

ブルノ市内にある一番小高い丘の上に建てられたこの城は、ブルノの町が出来始めたころ、戦略的な点から特に重要な意味を持っていました。敵がこの丘を占拠して街を攻撃するために悪用することを防ぐ強固な防御地点でした。

1277年、ボヘミア王かつモラビア辺境伯であり、この城の創設者であるとされているプシェミスル・オタカル2世が、城の礼拝堂を洗礼者ヨハネに捧げ、ドウブラブニーク教区司祭であるインドジフに管理を委ねたことが記録されていますが、文献上、シュピルベルク城が記述されているのはこの時が初めて

です。この礼拝堂が城内のどこにあったのかは、これまで証明されておらず、確実にはわかっていません。

翌年、シュピルベルクにてボヘミア王家の総会が開催されました。この総会の議長を務めたのはプシェミスル・オタカル2世ではありませんでしたが、総会は盛大に執り行われました。シュピルベルク（当時は「シュピルベルヒ（Spilberch）」）という名称は、1279年に初めて（この丘を示す名称として）文献に現れ、その後、この城の名称としても使われるようになりました。この当時の城の様子は後ほどご案内いたします。



モラビア辺境伯居城シュピルベルク（14世紀当時）
ペトル・バブレチカ、アレシ・ナブラーチル作

北東方面からの眺め（2017年）

モラビア辺境伯の本拠地

14世紀から15世紀初頭にかけて、シュピルベルクはルクセンブルク家モラビア辺境伯の居城として使われていました。まず、カレル4世の弟であるヤン・インドジフが住み、その後、その息子であるヨシュト・ルツェンブルスキー（モラフスキー）は自身が亡くなる1411年までこの城に住んでいました。ヨシュト・ルツェンブルスキーはモラビア地方を統治した政治家の中でも最も重要な人物の一人であり、ローマ王の称号も獲得しました。

1411年、ルクセンブルク家モラビア辺境伯の後継者が途絶えたことから、その後、シュピルベルク城は軍事要塞として利用され、城伯が管理するようになりました。フス戦争

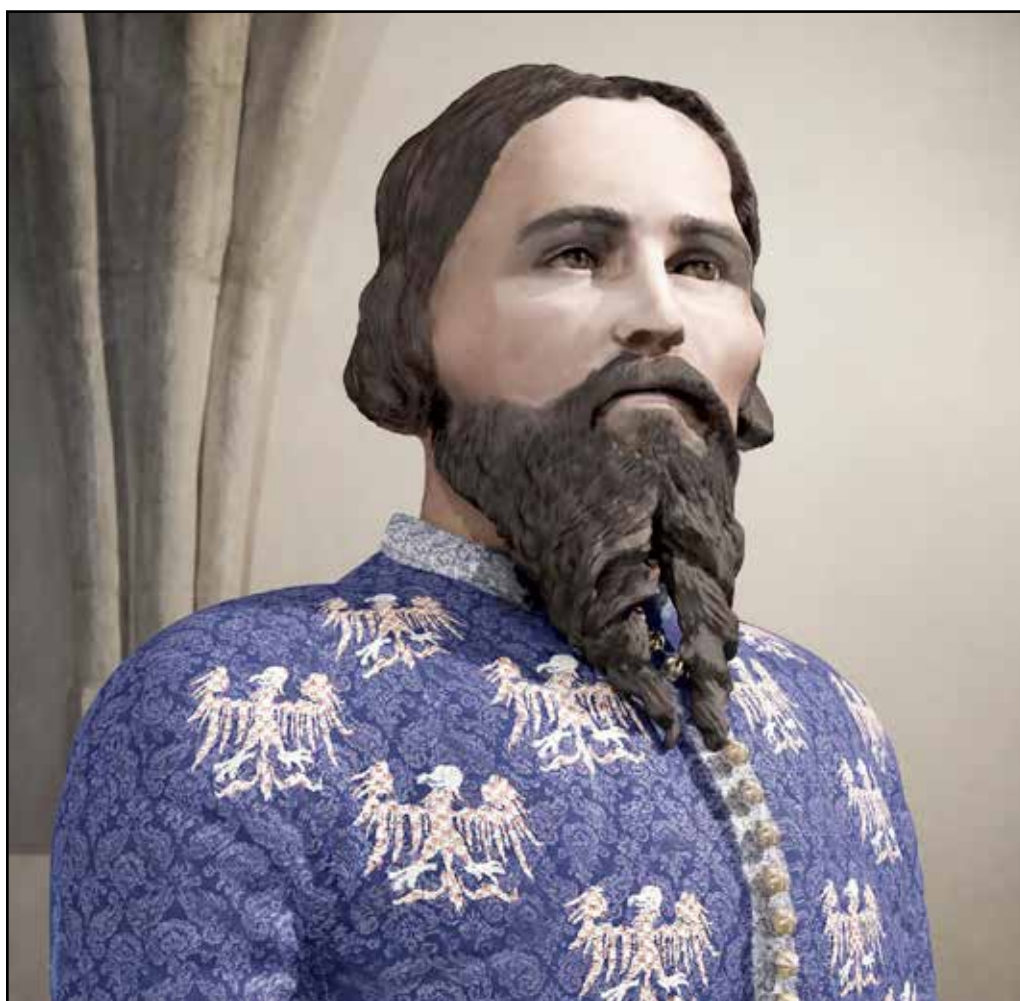
の中でも、特にボヘミア王イジー・ス・ポジエブラトとハンガリー王マティアス・コルヴィヌスの間で行われた戦争において、要塞としての役割を果たしました。

フス戦争後、シュピルベルク城の軍事的な重要性が低下するにつれ、城を維持していくことに対する統治者の関心も薄らいでいきました。1560年からシュピルベルクはブルノの町が所有するようになり、城はブルノ市の役人により管理され、大規模なものではありませんでしたが、軍の駐屯地が置かれるようになりました。その結果、城は荒廃し、1578年には火事が発生し、焼け落ちました。

i おすすめ：ヨシュト・ルツェンブルスキーとシュピルベルク初期の歴史については、展示『城から要塞へ』にて詳しく解説しています。



中世に造られた城（円筒形の塔）の基礎部分（基礎が一部見えている部分）



展示『城から要塞へ』にて展覧されているヨシュト・ルツエンブルスキー
（コンピューター可視化）

モラビアの要塞

シュピルベルク城は三十年戦争で重要な役割を果たしました。ボヘミア貴族の起こした蜂起にモラビア貴族の一部が参加したため、刑罰としてこの城に幽閉される事態が発生しました。その結果、1621年、シュピルベルク城はブルノの町から皇帝フェルディナンド2世（1578～1637年）に没収されることになりました。1645年夏、シュピルベルクは崩壊寸前の状態にありながらも、ヤコブ・ジョージ・オギルビ（1605～1661年）の指揮下、力では数倍も優勢だったスウェーデン軍による包囲を3か月間耐え抜いたことから、その後の戦争情勢に大きく影響を与えることになりました。

皇帝は、シュピルベルク城が戦略上いかに重要であるか認識していたため、多大な資金を投じて再建しました。軍事技術者ピエール・フィリップ・ベシャード・ド・ロシュパンが指揮を取り、その後100年以上かけて、シュピルベルク城は徐々に巨大なバロック様式の要塞へと改造されました。1840年代には、城の建物両側にある堀に砲郭が造られ、皇帝ヨーゼフ2世（在位1780～1790年）の時代には、ハプスブルク王朝における最も過酷な監獄の一つとして歴史に名を残すことになりました。18世紀中頃、フランツ・フォン・トレンク大佐がシュピルベルク（の砲郭ではなく、城の裏側の堀に建っていた建物）において終身刑に服し、獄中で死亡しています。

この監獄では、主に長期刑、終身刑に処せられる刑事犯が収容されていました。1790年代からは、政治犯とみなすべき囚人もここへ収監されるようになりました。1795年秋にはフェレンツ・カジンツィをはじめとする総勢15名のいわゆるハンガリー・ジャコバン派も収容されています。

要塞は、皇帝ナポレオン1世（1769～1821年）が2度にわたりブルノを訪問した後、1809年の占領に至った時に事実上崩壊することになりました。ナポレオンは、シュピルベルクの建物でも戦略的に重要な部分、例えば南西側堡塁のいくつかをフランス人の戦闘技師に命じて破壊させ、井戸を埋め、大きい方の中庭にあった武器庫を破壊しました。その後、シュピルベル

クは1820年、要塞としての地位を正式に失うことになりました。



『1645～1646年のスウェーデン軍によるブルノ包囲』（一部抽出） ヒエロニムス・ベノ・バイエル、ハンス・ヨルク・ゼイサー 作 （オリジナルは展示『シュピルベルクに見るブルノ』に展覧）



シュピルベルク城の中庭（大）にあるジョージ・ヤコブ・オグルビの紋章。



おすすめ: スウェーデン軍によるブルノ包囲については、案内ツアー『稜堡・砦』にて詳しく説明しています。



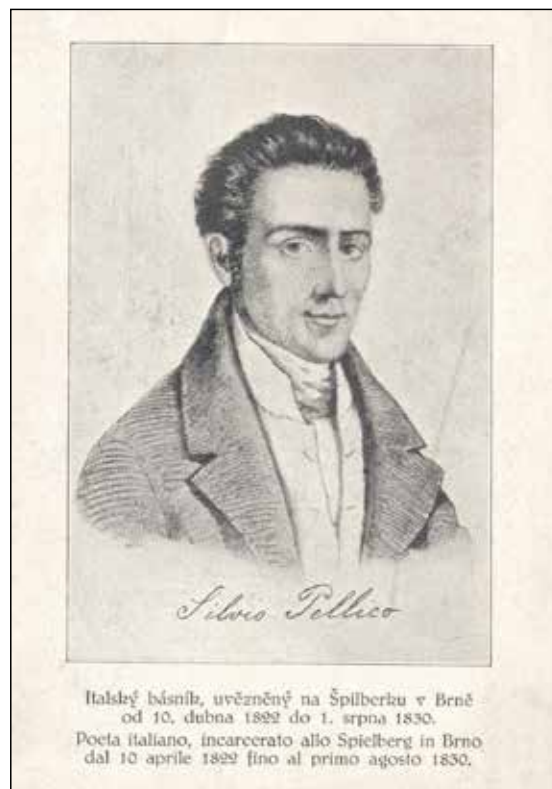
おすすめ: シュピルベルク監獄については、案内ツアー『砲郭・監獄』にて詳しく解説しています。

外国の民族も収容された監獄

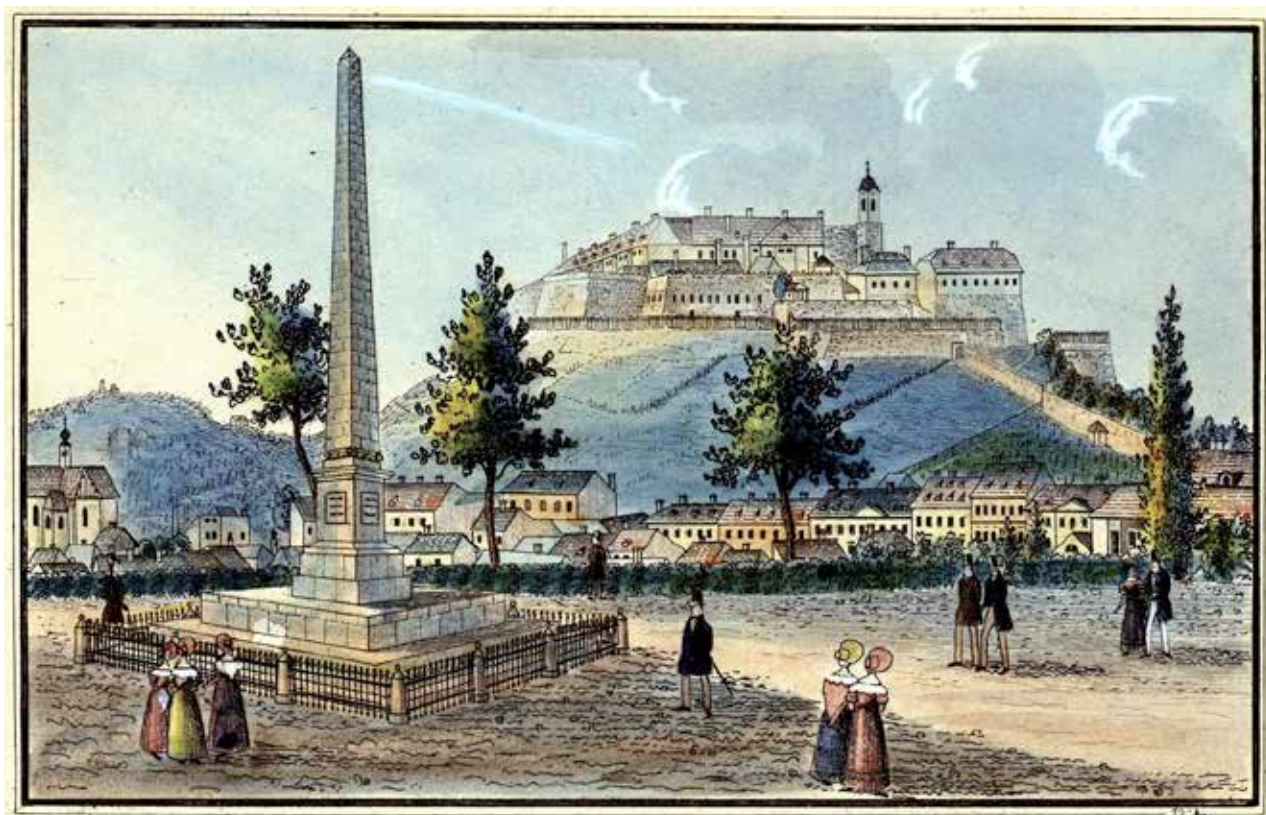
同年、それまでの要塞は民政管理下に置かれ、その後30年以上にわたって監獄として使用されることになりました。監獄になった直後に収容された（政治犯とみなすべき）囚人の中には、1820年代初頭のことですが、イタリアのカルボナリや青年イタリアのメンバーがいました。中でも最も有名なのは、詩人のシルビオ・ペリーコで、ペリーコは出獄後、『我が投獄生活』という本の中で、この監獄の回顧録を綴りました。

一つの民族グループとして最も多くの人（男性約200人）が収容されたのはポーランドの革命推進者たち、特に1846年オーストリア支配に対するクラクフ蜂起に参加した人々でした。その一人であるヘンリク・ボグダンスキは、ペリーコと同じくシュピルベルクの監獄にて得た経験を、著作『シュピルベルクのポーランド革命家』としてまとめました。

1855年、皇帝フランツ・ヨーゼフ1世によって民政の監獄が廃止される以前は、悪名高いバツラフ・バビンスキーもこの監房の一室に幽閉されていました



シルビオ・ペリーコ 1920年代の絵葉書



『フランチシュコフ公園からの眺め（1820～1850年）』シルビオ・ペリーコが収容されていた時代のシュピルベルク

おすすめ：シュピルベルクの監獄については、展示『シュピルベルク・民族の監獄』にて詳しく解説しています。

#hradspilberk
#vilatugendhat
#meninskabrana
#arnoldovavila

f @Muzeum mesta Brna
@Spilberkzije
i @hrad.spilberk

兵舎としてのシュピルベルク

その後約100年間（1858～1960年）、シュピルベルクは再び軍隊に占拠されました。500人ほどの兵士を収容する兵舎として、オーストリア・ハンガリー帝国軍、チェコスロバキア軍、ドイツ軍、そして第二次世界大戦後は再びチェコスロバキア軍が使用しました。

1862年、シュピルベルクはブルノ市に譲渡され、その斜面には公園が造られました。

この時代の重要な出来事として、1880年、シュピルベルクの砲郭と展望台が一般に公開されるようになったことが挙げられます。このため、砲郭は今日に至るまで、シュピルベルク城の中でも最も多くの人々が訪れる

場所となり、ブルノ市内でも継続して行われている最も古いガイドツアーとなっているのです。

第一次世界大戦中、及び特に第二次世界大戦初期に、シュピルベルクは再び刑務所として使用されるようになりました。1939～1941年には、ドイツ国防省（Wehrmacht）の兵舎として利用するための大規模な改修工事が行われました。シュピルベルクは、モラヴィア辺境伯の城、つまりドイツ軍人の模範とされたドイツ騎士団領主の城としてみなされました。当時の面影が残っている部分を、現在も数か所、城内にて見学することができます。



オーストリア・ハンガリー軍の兵舎だった時代のシュピルベルク ヨーゼフ・クンツフェルト 『城の東側棟の眺め（1907年）』



ドイツ国防軍兵舎だった時代のシュピルベルク 撮影：ヘルベルト・オート（不詳）『シュピルベルク城の東側棟の眺め（1941年頃）』

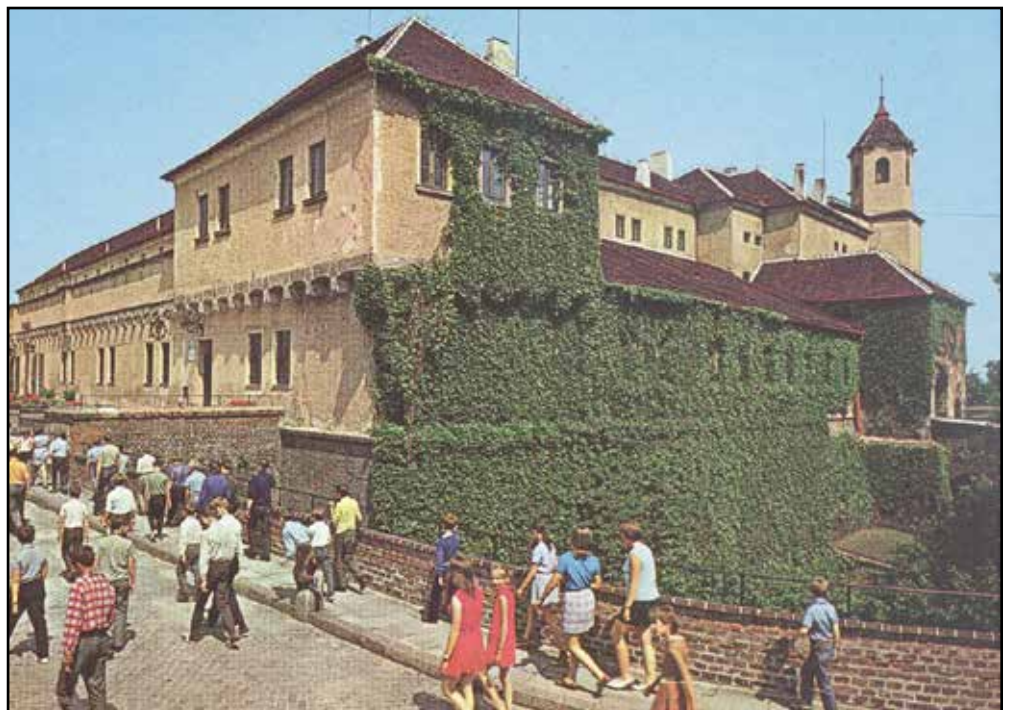
ブルノ市博物館・国立文化財

シュピルベルクは第二次世界大戦後、チェコスロバキア軍により利用されるようになりました。1960年、この城にブルノ市立博物館が移転し、シュピルベルクが国の文化財に指定された年でもある1962年には初の展覧会が行われています。

1960年代以降、シュピルベルクでは、主に博物館の建物として利用するための改修工事が行われました。この時、第二次世界大戦

中ドイツにより改修された部分がほぼ取り除かれました。

1980年代以降、シュピルベルクの全面的な修復工事が行われています。工事は現在、最終段階を残すのみとなっていますが、その前の段階では、東側の稜堡にあるかつての貯水槽の修復作業が行われ、2020年に終了しました。現在この場所是一般公開され、『石の神殿』展が開かれています。



シュピルベルクは、1960年以来、ブルノ市立美術館の所在地となった。
1960年代の絵葉書）

1. 橋

18世紀、シュピルベルクはバロック様式の巨大な要塞に生まれ変わりましたが、今、私たちは、その時代に建設された橋の上にあります。橋が造られたのは、主に実用的な理由からでした。広い方の中庭にあった武器庫から城壁まで、重火器を移動させるために橋が必要だったのです。

この時代に、皆様の左手に見える建物（①）が建てられました。ここは要塞司令官の住居でした。中世の時代、この部分の壁は前面方向に出ていました（ツビンガー、チェコ語ではパルカーン）。この時代に造られた石の銃眼（②）が残っています。第二次世界大戦中は改修され、当時ここにあった駐屯地の下士官用食堂になりました。1960年代、この食堂は、建築家であるカミル・フクスにより改修され、国営企業インターホテル・ブルノのレストラン・ワインバーになりました。

右手に見える増築部分（③）は18世紀に建てられたもので、シュピルベルクにて仕える聖職者の家でした。

橋は、以前、木造の跳ね橋があった場所に作られました。ここに跳ね橋があったことは通路上部に滑車があることからわかりますが、現在の滑車は、1940年代、城がドイツ国防軍用に改修された時、シュピルベルクの中世的な特徴を強調するために設置されたものです。同時に、扉の上に、18世紀初め石灰で造られた紋章（④）が取り付けられました。この紋章は、ボヘミアとモラヴィアがハプスブルク家の支配下にあることを象徴しています。オーストリア帝国の双頭の鷲が爪で帝国権力の象徴である笏と剣を握っており、鷲の胸にはボヘミア（ライオン）とモラヴィア（ワシ）の紋章が彫り込まれています





城の正門ファサードに描かれたオーストリア帝国の鷲

2. シュピルベルク城の正門

これから城の正門を潜り抜けていきます。正門は中世に造られてから、その後繰り返し改修されてきました。現在の姿は1940年代に出来上がったものです。

皆様の左手には、13世紀に建てられ、この城の中でも最も古い歴史を物語る「セディーユ（①）」と呼ばれる部分があります。この部分は、城の守備隊が休憩する時に使われ

たと考えられています。中世以来ブルノにとって代表的な建築材料であるクリノイド石灰岩を使って造られています。この石灰岩は岩場ストラーンサー・スカーラから切り出されました。同じ種類の石灰岩は、これから城の場内をご案内する中、他の場所でもご覧いただくことができます。



3. 中庭（小）

今、私たちは小さい方の中庭にいます。中世の時代、シュピルベルク城には大きな中庭が一つあるのみで、その広さは93×53メートルという壮大なものでした。長方形の形状をしており、二方向から入場できました。その一方向である東側、つまりブルノの町側には、14×13メートルの「ドンジョン」と呼ばれる建築方式で造られた巨大な角柱型の塔（居住できる塔）（①）があり、もう一方向の西側には直径15メートル（石造りで壁の厚さは最大3.5メートル）の円筒形の塔があって、シュピルベルク城を守っていました。

現在、円筒形の塔は残っていません。これから向かうシュピルベルク城の東側部分にある建物は居住・応接の目的に、西側部分にある建物は城の運営管理に使われていたと考えられています。

ツアーガイドが立っている背後にご覧いただくことのできる、中棟と呼ばれる部分（②）は、1930年代になってから建造されました。砲郭にあった刑務所の廃止に伴って建てられることになりましたが、この時、刑務所（上部）の収容人数を増やすために城の上部で新しい棟を建設することが決まりました。



4. 東側にある棟

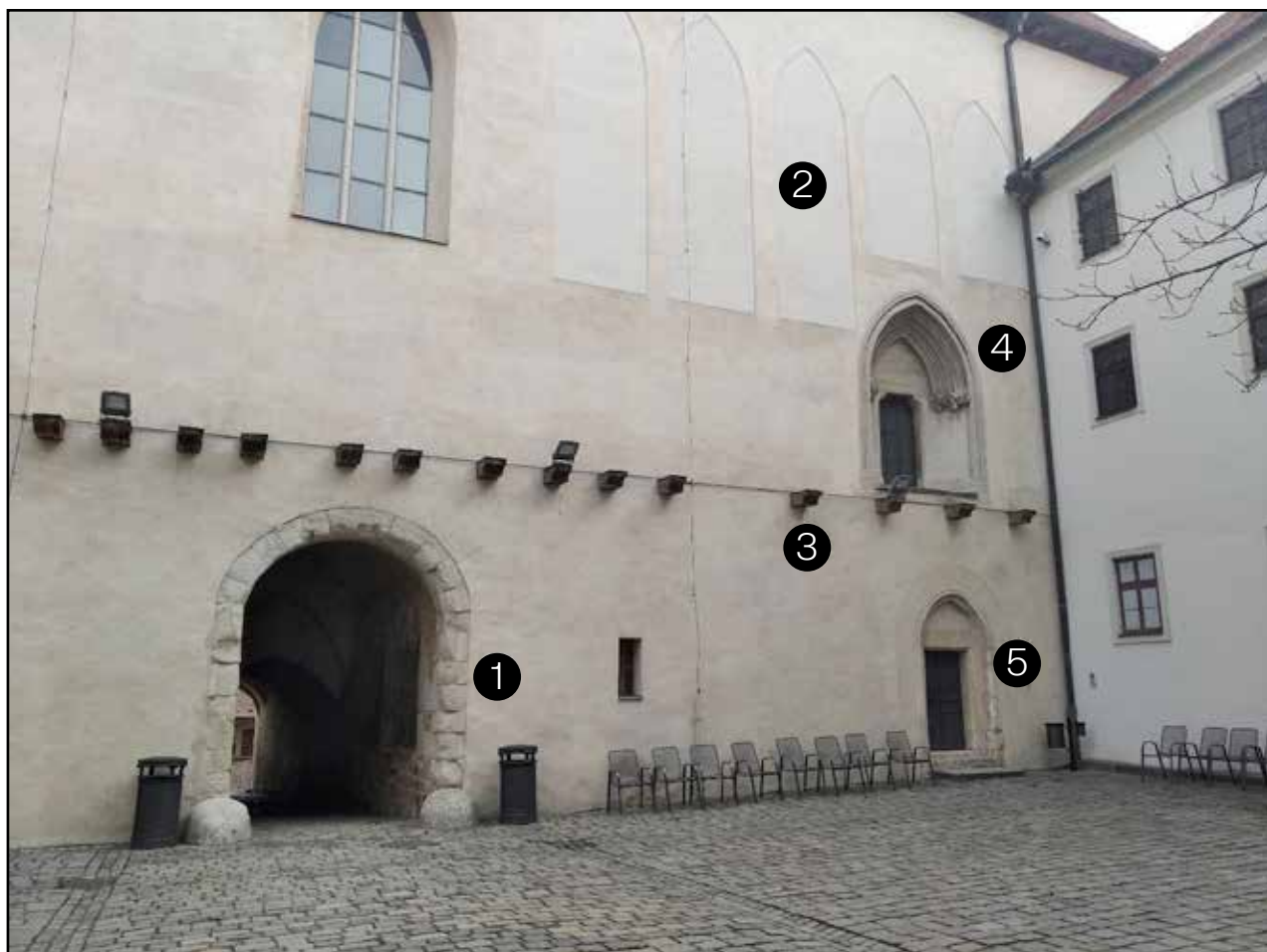
シュピルベルクの東側にある棟は、ゴシック様式で建築された城の中でも比較的そのまま当時の姿を残している部分になります。城の中にあるその他の棟にて建てられた当時の建築様式がそのまま残っている部分は外周壁のみです。

ここでは特に、ゴシック様式で造られた、シュピルベルク城へ入場するための車両通行路（①）をご覧ください。現在見られる東側棟は、1999～2000年にかけて行われた文化財保存修復作業にて、ゴシック様式の外観が「復元」された姿を呈しています。

ファサードに先端の尖った円柱形の跡（②）が見えますが、ここは昔、窓でした。木から造られた梁（③）は当時、ここに木造の回廊があったことを示しています。回廊から

は、豪華な門（④）を通してシュピルベルク城の応接ホールへ行かれるようになっていましたが、この門もやはりクリノイド石灰岩でできています。城の1階に、当時の姿を一部残した門（⑤）がありますが、ゴシック・ホールと呼ばれている、ゴシック様式で造られたホールへとつながっており、これからこのホールを見学します。

ゴシック・ホールへは、先端が尖った形状をしている門を通して入ります。この門の南側（右側）部分は、門が造られた当時のままの姿となっています。その他の部分は近年、修復されました。現在、このホールは、ブルノ市立美術館の短期展示に使用されています。



5. ゴシック様式のホール

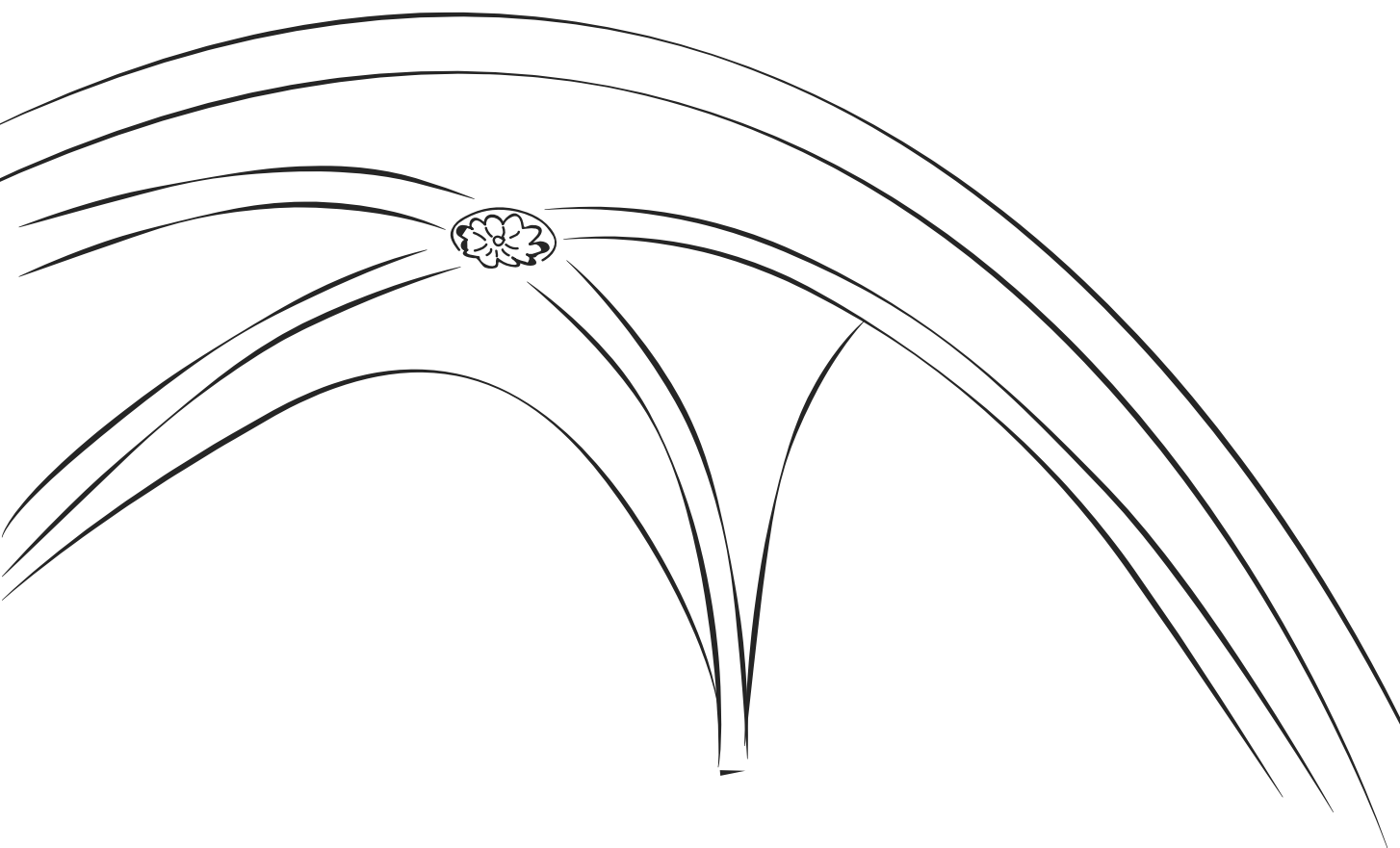
ゴシック・ホールと呼ばれるこの部屋は、シュピルベルク城の中でも最も古い部分となっており、造られた当時の姿をほぼそのまま留めている数少ない場所の一つです。

この空間は、13世紀中頃、城が建てられた時に造られました。

ホールは、中央が支柱になっている2つのアーケードによって2つのスペースに分かれています。そのうちの主要空間を写した上記写真を見ますと、ホール建造当時から残っている丸天井（ボールド）のリブ（①）、そしてリブが伸びている先にはぶどうと柵の葉のレリーフで覆われた部分（②）を見ることができます。目の前にあるのは近代に造られたニッチ（③）（壁の開口部）で、ここには昔、石のベンチがあったとされています。窓枠部分が広く、大理石の板を人工照明で照らした窓を見ると、当時の窓の様子をうかが

うことができます。床のタイルはレプリカです。現在、この部屋へは、造られた当初のまま現在まで残っているゴシック様式の門から入ることができます。

このスペース本来の用途についてはほぼ何もわかっていません。一説によると、シュピルベルク城で仕える使用人たちが祈祷した礼拝堂だったとされています。バロック時代に要塞だった頃（18世紀、例えばフランツ・フォン・トレンクがシュピルベルクに幽閉されていた頃）には守備隊用の厨房に改修されました。19世紀から20世紀初頭には、ここに地元駐屯地の食堂がありました。1928～1939年にかけて、このスペースはチェコスロバキア軍が使用し、レジスタンス博物館（軍団博物館）の展示が行われていました。





6. 角柱型の塔

角柱型の塔は、中世におけるシュピルベルク城の防御システム上、重要な役割を果たしていました。13×14メートルの長方形をした建物は、東側にある車両入口門を守備していたと同時に、その壁が強固であったことから、城の守備隊が避難する場所として使われていました。当初、塔は数階建てでしたが、窓がほとんどないため、空間としては非常に暗かったに違いありません。しかし、シュピルベルクに居住する人にとっては、身の安全を確保するために必要だったのです。

バロック時代に要塞の改築工事が行われた時、非常に厚い壁で囲まれたこの暗い部屋の実用化が検討され、最終的に空間を仕切って、シュピルベルク兵舎の兵士が罪を犯した場合に罰する牢屋として利用することになりました。これらのスペースは、1939～1940年にかけて、ドイツ国防軍とゲシュタポがシュピルベルクを占領した時にも同様の目的で使用されました。かつての角柱塔に造られた監獄は、囚人一人を他の囚人から隔離して拘禁するための独房として使用されました。

1999～2000年にかけてシュピルベルク城東側の棟の修復工事が行われた際、城を防御するための塔本来の機能を一部復元することが決まりました。各階に敷かれていたバロック時代の床を取り払い、建物空間が持つ開放性を強調する試みが行われました。すでに崩れかけていた中世の外周壁を補強するため、帯状の放物線アーチ形（①）にレンガを積み上げるといった近代的な興味深い要素が用いられました。この部分は、ブルノ見本市会場のパビリオンAを表象しています。

角柱塔の内部は、現在、嚴重に保護された「宝物殿」の趣を呈していますが、ブルノ市博物館の重要なコレクションを展示するために利用されています。

床には、ボヘミア王国、及びその他プシェミスル・オタカル2世の支配下にあった領土の地図（②）があります。正面に見えるのは、統治者の紋章です。各領土は紋章で表示されていますが、クライン、ケルンテン、シュタイアーマルク、エスターライヒ、モラビア、ボヘミアです。





紋章は3か所で欠如しています。ヘプ、ビンディシエ・マーク、ポルデノーネの町です。プシェミスル・オタカル2世の時代にこれらの地方にて使われていた紋章で彩色の施されたものが紋章学者によると知られていないためです。地図は当時の習慣で南方向、つまりローマ方面が基準になっています。「北を上」とする地図がヨーロッパで登場するのは、14世紀にコンパス（方位磁石）が普及するようになってからのことです。

プシェミスル・オタカル2世が統治していた時代のシンボルを、君主の兜飾り（クレスト）からインスピレーションを得て芸術的に表現したもの。



クライン



ケルンテン



シュタイアーマルク



エスターライヒ



モラビア



ボヘミア

角柱塔の壁面には、当博物館のコレクションの中でも特に興味深い所蔵品のひとつが展示されています。18世紀前半に造られた「モラビアの鷲」です。菩提樹の木を彫って制作されたこの作品は、構造上の工夫が施されており、木製部品を組み合わせることで鷲の胴部が盛り上がるように造られています。翼は肩の根元でクサビとネジを使って接続しています。

彩色の仕方から、ブルノ市内の重要な建築物の内装に使われていたものであると考えられています。

2008年、ブルノ市立博物館のインドジフ・ユルチャ保存修復師によって修復作業が行われました。



モラビアの鷲

7. 車両用通路の上のスペース

シュピルベルク城東門の上に建てられた建造物がどのような目的で使われたのか、文献資料調査のみならず、建築史学調査も行われましたが、確認されていません。しかし、この空間は数階に分かれていた可能性が高いことは明確になっています。現在見られるような水平方向にスペースが分割されていない状態のホールについて、その用途を述べた一説によると、城が建設された中世のある段階にて、城の礼拝堂になったとされています。スペースは細長く、祭壇が置かれていた場合、その位置が東側を向いているため、キリスト教の聖域を建設する条件の一つを満たしていたこととなります。しかし、中世に城は自然

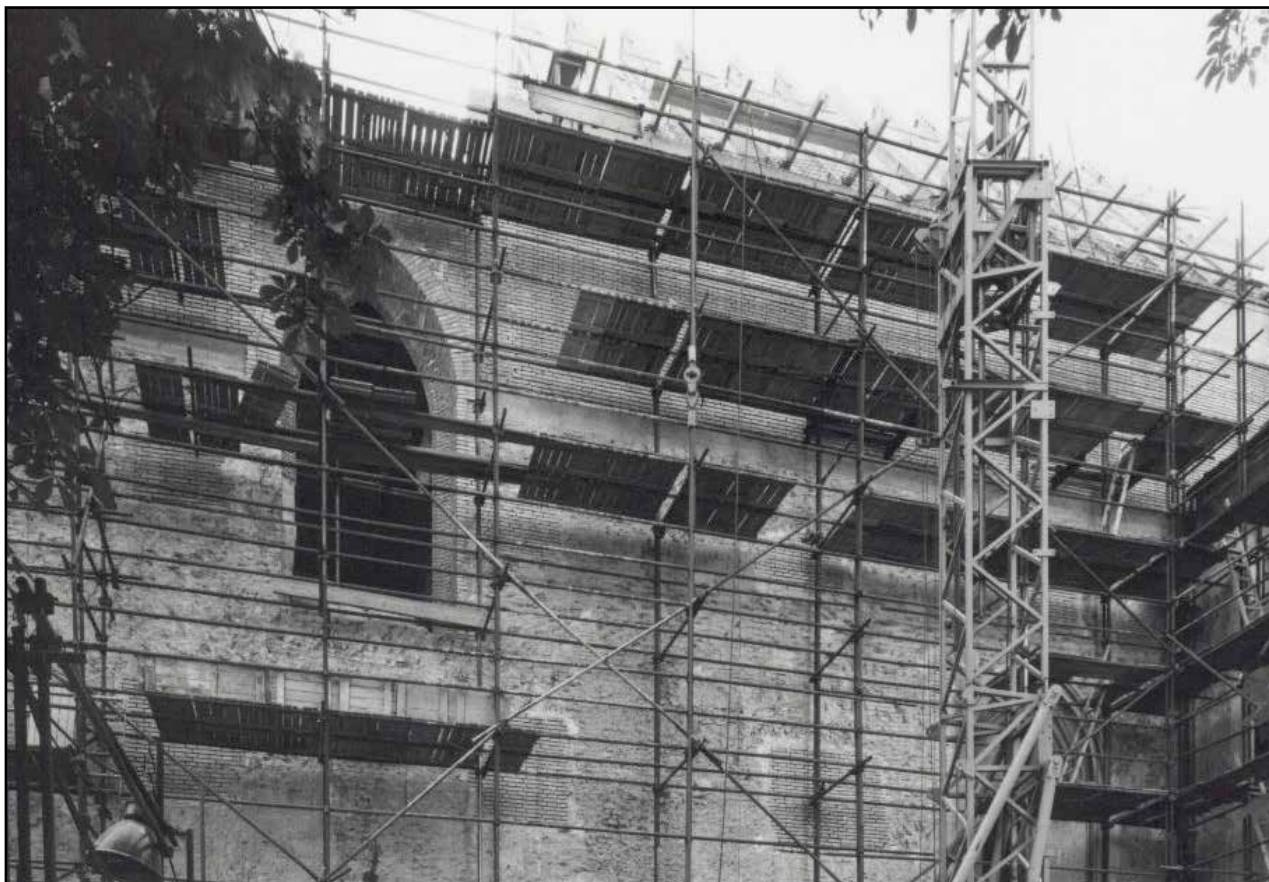
環境の厳しい場所に建てられたことから、多くの場合、大工が礼拝堂を正しい位置に建築することは不可能だったため、所定の方角から逸脱していても、教会の許可が下りていました。そのため、角柱塔に聖域が置かれたという説は正しいとも、間違っているとも言えないのです。

この礼拝堂については、1277年9月4日、プラハにてプシェミスル・オタカル2世がシュピルベルク城に関して発行した現存する最古の文書の中でも言及されており、その中で以下のように記録されています。

"・・・我々が建設した礼拝堂は洗礼者ヨハネに敬意を表して奉献した・・・"

修復工事が行われた際、丸天井が崩れ落ちた後の瓦礫の中から、十字に伸びたリブを天井部分で固定する部分（①）が見つかりまし

た。建てられた当初、天井は、先程訪れたゴシック様式のホールと同様、リブが十字型に伸びたボルトだったことが考えられます。



小さい方の中庭から城の東棟を望む（修復工事中の様子）。1990年代後半の写真。



8. 王の礼拝堂

「王の礼拝堂」と呼ばれているこの場所は、東側の棟の中でも重要な空間です。元々、天井は左右の大きさが不均等な十字型ボードになっており、彩光のため、頂点が尖ったアーチ形の高窓が造られました。小さい方の中庭から非常に華麗な入口門を見ることができますが、その奥にある部屋へは中庭から外周壁に沿って造られていた木製の回廊を通して入りました。この空間全体がどのような目的で使われたのかについては、今日、二つの説があります。一つは、君主又はその代理人に謁見するための主要会議場だったとする説、もう一つは洗礼者ヨハネに奉献された城の中でも最も重要な礼拝堂だったとする説です。

1997～2000年にかけて行われた城の修復工事では、中世の壁で現在でも残っている部分が見えるようにし、建築要素の欠如している部分を補足して、礼拝堂として仕上げるようになりました。部屋の南側に造られた聖歌隊席（①）が、初期ゴシック様式の窓と、壁に設けられた座席（②）を覆っています。また、部屋縦方向の壁にはセディークになっているアーケード（③）も復元されました。丸天井は復元されなかったため、この空間は屋根裏の腕木（④）まで垂直方向に開放されており、シュピルベルク城の中でも最も壮大な印象を醸し出しているスペースとなっています。



この広間が建てられた当初の正確な様子も、そしてどのような目的で使われたのかについてもわかっていませんが、この部屋は中世において城の所有者へ謁見する時に使われ、城の中でも豪華な部分に相当したと考えられています。ボヘミア王、モラヴィア辺境伯であったヤン・インドジフ、その息子のヨシュト、プシェミスル・オタカル2世、カレル

4世とその最初の妻である（義母から反対され、ブルノに追放された）バロア家のブランカがここで過ごしたことは確かです。シュピルベルクのこの場所で祈祷したのか、或いは訪問者を受け入れたのか、今では知る余地ありませんが、東側の棟で建立当時のゴシック建築が残っている部分は、今日もなお王家の光輝を放っているのです。



1939～1941年にかけてドイツ国防軍のために修復された王室礼拝堂

城の東側棟にあるステンドグラスの窓

シュピルベルク城の最も古い部分である東側にある棟の修復作業は、スタニスラフ・リベンスキーとヤロスラバ・ブリヒトバーのデザインによる新しいステンドグラスが取り付けられ、2003年に完了しました。

このステンドグラスは、金属で区切られた中に様々な色のガラスが組み込まれた古典的なものではなく、各窓が一色で調和しています。この歴史的な場所にふさわしい作品が出来上がるよう、鉛ガラスの塊は通常はあまり使用されない酸化物を使って黄金色に近くなるまで着色し、その後ガラスがカットされ、

磨かれて正確な形状に仕上げられました。同様の作品は、チェコ国内では聖ビート大聖堂の聖バーツラフ礼拝堂とホルショフスキー・ティーンにあるゴシック様式の礼拝堂においてのみ見ることができます。有名なガラス工芸家であるスタニスラフ・リベンスキーにとって、これは最後の作品となり、残念ながらその完成の暁を目にすることはありませんでした。そのため、シュピルベルクの作品はスタニスラフ・リベンスキーの伴侶であるヤロスラバ・ブリヒトバーが完成しました。



9. ルネサンス・ラウンジ

1994～2000年にかけてシュピルベルク城東側の棟で修復工事が行われた時に出来上がった部屋です。「ルネッサンス・ラウンジ」という名称は、城内で唯一現存するルネッサンス様式の窓があることから付けられました。この後、この窓を屋外からご覧いただきます。今日もルネッサンス時代に造られたままの姿で残っている部分は、窓枠が取り付け

られている壁の部分、そして奥まった壁の部分（②）に赤色の木炭で言葉が書かれている部分（①）です。木製の天井（③）や窓の木製部分及びガラスの部分（④）をはじめ、その他の部分はすべて現代になってからルネッサンス様式で造られました。古くから残っている家具及び古い様式を尊重して造られた家具は、ブルノ市立博物館のコレクションです。



ルネサンス・ラウンジの絵画

壁（右側）

- 皇帝ヨーゼフ1世及びカール6世の肖像画
画家シモーネ・ジオニマ（1655～1731年）
作

ヨーゼフ1世とカレル6世の肖像画は、ブルノ市評議会の注文でブルノ市庁舎の会議場を飾るために、ジオニマによって描かれました。

ヨーゼフ1世

(1678年生～1711年没)

が皇帝の地位に就いていたのは、1705～1711年までのわずか6年間でした。1700年にハプスブルク家のスペイン王朝が途絶えてから、スペインの王位継承をめぐる争いが起き、ヨーゼフ1世の時代にスペイン継承戦争が本格化しました。ヨーゼフ1世の肖像画は1709年に完成しましたが、1711年4月初め、絵の額縁から帝冠の宝珠が自然に落下するという出来事が起きました。皇帝は1711年4月17日、天然痘が原因でウィーンにて死去したため、ブルノの人々の記憶にはこの出来事が不幸を知らせた前触れとして残ることになりました。

カール6世

(1685年生～1740年没)

はヨーゼフ1世の弟で、ヨーゼフ1世の死後、ローマ・ドイツ皇帝の位を継承しましたが、ローマ・ドイツ皇帝であると同時に、ボヘミア王であり、ハンガリー王、モラヴィア辺境伯でもありました。**カール6世の時代にシュピルベルク城の井戸は深さ112mまで掘り下げられ、チェコの中でも非常に深い井戸のひとつになりました。この井戸の完成により、要塞を前面方向に拡張し、稜堡及びカーテンウォール（帳壁）で守り、シュピルベルクを巨大なバロック様式の要塞（城塞）に改造する工事が完了しました。**



ヨーゼフ1世



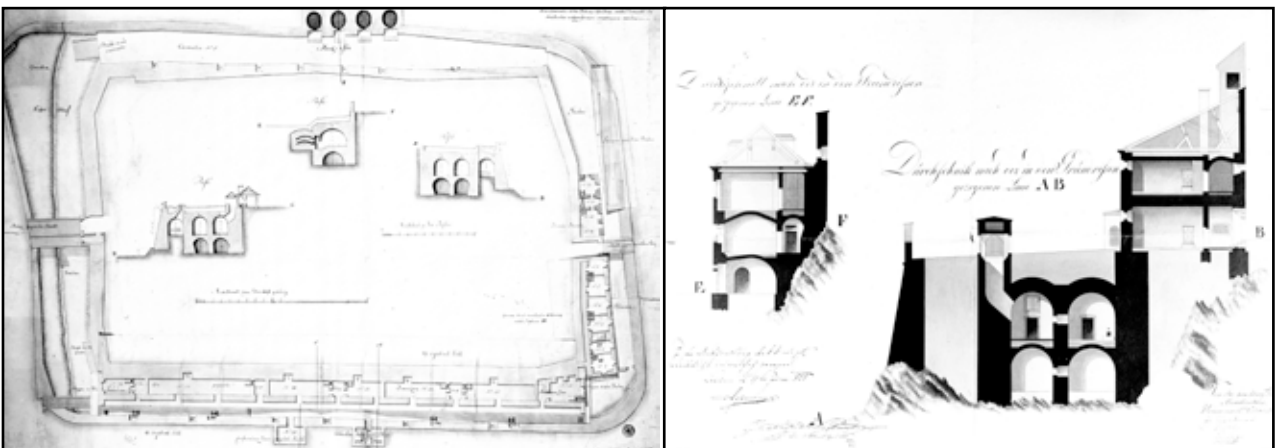
カール6世

壁（左側）

- マリア・テレジアとヨーゼフ2世の肖像画
作者不明



北側にある砲郭への入口



マリア・テレジア (1717年生～1780年没)

ボヘミア王として君臨した唯一の女王で、ロートリンゲン公フランツ・シュテファンと結婚し、1745年にローマ皇帝として戴冠しました（このためマリア・テレジアは女帝と呼ばれるようになりました）。マリア・テレジアが統治し始めて間もなく、シュピルベルクとブルノは、100年ぶりに再び戦争の危機に直面しました。その後、プロイセンはオロモウツを占領し、ブルノの町とシュピルベルクを包囲しましたが、幸いにも堅固に防御された町と要塞を攻撃するまでには至らず、1742年4月に撤退しました。その後ロートリンゲン公カールはシュピルベルクを訪問し、見学後、要塞に守備隊の避難場所であり、普段は軍事物資の保管場所として利用する**砲郭**を造る決断を下しました。この決定は、マリア・テレジアにも支持されました。

マリア・テレジア女帝とロートリンゲン公フランツ・シュテファンが1748年にブルノを訪問していますが、これは特別な出来事でした。ゼルニー市場にあるディートリッヒシュタイン宮殿に滞在していた皇帝夫妻は、華やかな聖体顕示の行列にも参加し、皇帝とその弟のロートリンゲン公カールもシュピルベルクを訪れ、新しくなった要塞を見学しました。1767年、マリア・テレジアは当時感染すると死亡に至ることもあった天然痘にかかり、病状は終油の秘跡を受けるまで悪化しましたが、女帝の病状が回復したことを祝い、7月には**シュピルベルクの城壁から大きな花火が打ち上げられました**。

ヨーゼフ2世 (1741年生～1790年没)

は、母マリア・テレジアの死後、ハプスブルク家を一人で支配する権利を獲得しました。改革者として知られるヨーゼフ2世はシュピルベルクを自ら数回訪問していますが、司法制度や監獄の体制も改革したため、シュピルベルクもその影響を大きく受けることになりました。シュピルベルクの監獄は民政管理へ移行し、軍隊にとってはすでに不要となっていた砲郭が監獄へ改築されました。1784年9月3日、ヨーゼフ2世はシュピルベルク兵舎下階の空間を視察し、ここに終身刑囚を収容する木造の監獄を造るよう命じました。つまり本当の歴史はこれにまつわる伝説とは全く異なっていたのです。伝説では、ヨーゼフ2世が自ら監房に入ってみたところ、その時の体験が非常に恐ろしいものだったため、シュピルベルクにある監獄の中でもこの最も酷い監房を廃止した、として後世に語り継がれてきました。



マリア・テレジア



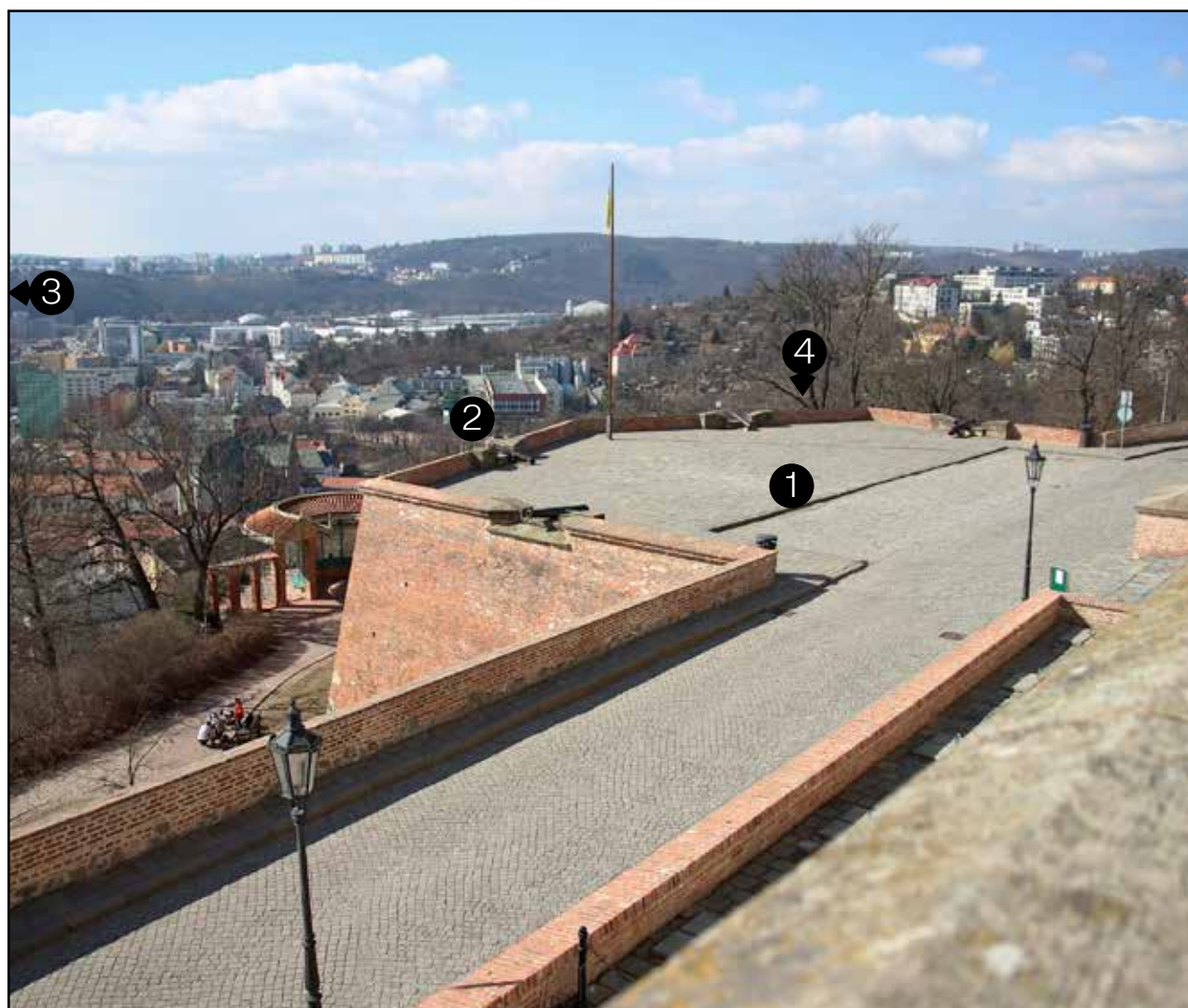
ヨーゼフ2世

10. 南側テラス

南側テラスと呼ばれる場所に来ました。今、私たちは、18世紀中頃（砲郭が造られた時とほぼ同時期）に建てられた旧兵舎の屋根の上に立っています。中世にシュピルベルクが城だった時代は、ここに建造物はなく、壁が前面方向へ出ている部分（ツビンガー、チェコ語でパルカーン）があるのみでした。目の前には、いわゆる大砲の砦（①）があり、その下には聖母マリア被昇天バシリカ教会堂（②）のあるブルノ旧市街が広がってい

ます。地平線左手の方角には、チェコで最も高い建物である旧AZタワー（③）（現Nタワー）が見えます。

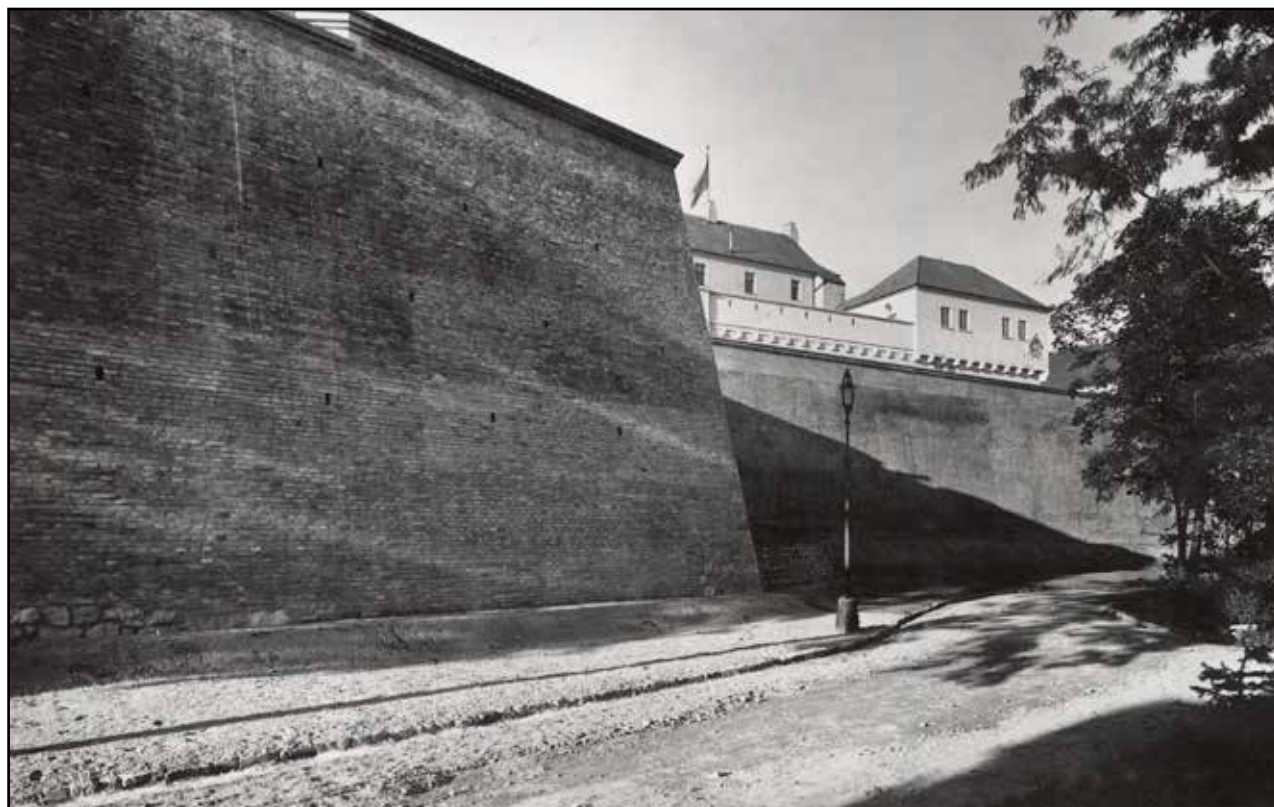
今日「大砲の砦」と呼ばれている部分は、第二次世界大戦中、シュピルベルクをバロック時代の要塞に見立て、城をドイツ国防軍の兵舎に改修した時代に建てられました。17世紀に建てられた当時の堡壘は、1809年、フランス軍によって爆破されています。



大砲の砦には、三十年戦争の時代にまつわる伝説「悪魔の砦」が残っています。

「スウェーデンのトルステンソン将軍は、ブルノの町を3日間で陥落する予定でしたが、実際は全く異なる展開となりました。戦い開始後3か月が過ぎても、ブルノの人々は一向に降伏する様子がありません。包囲の最終段階に入ったものの、トルステンソン将軍は絶望と激怒のあまり、『ブルノなど、悪魔の手に落ちてしまえ!』と叫びました。するとそれを聞きつけた悪魔が現れ、『どうぞ将軍のお気に召すまま、喜んでお助けしますよ。でもただというわけにはいきませんよ。将軍が勝利した暁には、ブルノの町を守り通そうと戦っている忌々しい守備隊の魂はすべて私のものになることを、将軍に私の前で自分の血でもって認めていただかなくてはなりません』と言いました。トルステンソン将軍は一瞬たりとも迷うことなく、自分の指を尖った物で刺すと自らの血で悪魔から提示された文書にサインしました。笑いが止まらない悪魔は一番近くにあった砲弾にまたがると、『シュピルベルクへ向けて撃て!』と命令しました。悪魔は自分の角と地獄で学んだ技量を生かして強大な城壁を破壊し、スウェーデン軍の要塞襲撃を手助けしようと思いましたが、敬虔なブルノ市民がシュピルベルクの城塞で聖地化の儀式をしっかりと執り行っていたことを計算に入れていませんでした。大砲の弾にまたがり、疾風のごとく城壁に近づいたその瞬間、要塞が何者をも通さないバールで被われました。悪魔は悲鳴を上げて、全力で砲弾から飛び降りようとしたが、あまりにそのスピードが速すぎて間に合わず、城壁に突っ込んでしまいました。こうして悪魔は城壁に突き刺さったまま、永遠に石となったのです……」。

現在でも塁壁左側面の城壁冠下の壁に組み込まれた「悪魔」の頭(④)がこの伝説を物語っています。ここから、「ツバメの巣」と呼ばれている場所を訪れます。



11. 東側テラス

今、私たちは東側のテラス、18世紀半ばに建てられた東側棟の屋根の上に立っています。当時、ここは砦の司令官が住む住居がありました。中世の時代は城のこの場所では建築工事は行われず、壁を前面方向に出してテラス（ツヴィンガー又はチェコ語でパルカーン）を造る工事のみが行われました。

私たちの背後には、ルネッサンス様式で造られた窓の開口部があります。このツアーの中ですでにご覧いただきましたルネッサンス・サロンの窓です。

眼下には前面側（東側）の塹壕（①）があり、その両脇には砲郭があります。

今、目の前に見える建物（②）は、運営管

理の用途に使われており、1960年からシュピルベルクに置かれたブルノ市立博物館の事務所と本部になっています。1847～1849年にかけて（つまり、盗賊のバーツラフ・バビンスキーがシュピルベルクで服役していた頃）、監獄の運営管理を目的として建てられました。

チェコスロバキア第一共和国時代（1918～1938年）、この城はチェコスロバキア軍の兵舎として使用され、ここには軍事検察官、旅団・師団裁判所などが置かれていたと考えられています。第二次世界大戦中、この建物はドイツ軍のために改修され、軍の厨房及び食堂として使われていました。



運営管理事務所の左側、ゲートのある場所（ここも第二次世界大戦中に建造）（③）には、1740～1750年にかけて州知事だったバルドルフ自由公フランツ・アウグスティンによって建てられた、バルドルフ礼拝堂と呼ばれた礼拝堂がありました。ゲート左側にある建物（④）は、今日、城の守衛が利用しています。建築監督者ヤン・コンラット・ゲルンラートの設計により1820年に建てられ、1847～1850年にかけて改築工事が行われました（城壁の端まで拡張されました）。



ウォルドーフ・チャペル

12. ツバメの巣

この建物は、シュピルベルクがドイツ軍の兵舎として改修された時代に建てられました。1939年8月、ボヘミア・モラビア軍政管理所ブルノ軍事建設局が、建築作業の立案・実行を担当することになりました。当局長で政府建築参事官だった建築家のノイベルトの下で、建築家のホロツホ及びエルビン・フランツ・アレクサンドル・コマが作業しました。歴史的建造物だったため、ブルノ文化財保存研究所所長兼ドイツ工科大学建築土木・美術史研究所所長カール・フリードリヒ・キューン教授の指示も仰いで造られました。

「ツバメの巣（ドイツ語：Schwalbennest）」と呼ばれている場所は、1940～1941年にかけて、ドイツ国防軍将校の娯楽室として利用する目的で、城の南東側にある角に造られました。造形美術的なデザイ

ン、調度品もその用途に応じたものとなっています。

最初にご案内する部屋には、モラビアの町をモチーフにしたタイル張りのストーブ（①）が置かれています。オーストリアの町エーバーシュワングで現在も営業を続けているアンガーマイヤー社の製造です。ドアを通り抜けた右手奥には、花崗岩でできた螺旋階段（これも第二次世界大戦中に造られました）があり、下士官用の食堂があった1階へ通じています。





撮影：ヘルベルト・オート（不詳） シュピルベルク
ツバメの巣 タイル張りのストーブ（アンガーマイ
ヤー社製造） オイゲン・フォン・ザボイエンの彫刻
1941年頃

二つ目の部屋は、木造の梁が天井下に出ている塗り天井、床は造られた当初の正方形に組まれた寄木細工になっていますが、一つ目の部屋に置かれていたストーブと同じ製造者によるペイント装飾のタイル張りストーブ（②）がこの部屋のインテリアの主役となっています。ストーブの上には、マヨリカ陶器で作られたオイゲン・フォン・ザボイエンの像（③）が置かれています（このため、この部屋は「オイゲン王子のサロン」と呼ばれることもあります）。第二次世界大戦後、この「ツバメの巣」は、一階下にあるワインバーとレストランの一部となり、1960年代には、建築家のカミル・フクスが、国営企業インターホテル・ブルノ用に改修しました。





Muzeum
města Brna

Facebook → @Muzeum.mesta.Brna @Spilberkzije
Instagram → @hrad.spilberk

#hradspilberk #vilatugendhat
#meninskabrana #arnoldovavila

spilberk.cz

